

アユのエドワジェラ・イクタルリ感染症について

内水面課
主任研究員 村木 誠一

1 背景・ねらい

アユは内水面漁業における重要な魚種の一つであり、全国で増養殖が行われているが、その現場においてはこれまで様々な病気が発生している。とりわけ、冷水病は増養殖場のみでなく、河川等の天然水域においても発生し、時には大量斃死の原因となっている。

そのような中、平成 19 年に広島県ほか 2 都県の河川において、新たに、アユのエドワジェラ・イクタルリ(*Edwardsiella ictaluri*)感染症の発生が国内で初めて確認され、その後、西日本を中心として、全国で発生事例が報告されている。

今回は、平成 22 年度に富山県で初めて発生が確認されたアユのエドワジェラ・イクタルリ感染症について、その発生状況およびその後の河川における調査結果を報告する。

2 成果の概要

(1) エドワジェラ・イクタルリ感染症の発生状況の概要

平成 22 年 8 月下旬から 9 月上旬にかけて、神通川においてアユの死亡が見られた。死亡魚および病魚には、鰭基部や肛門の発赤、腹部膨満等の症状が見られ、検査の結果、エドワジェラ・イクタルリ感染症が原因であると判明した。また、同時期に、庄川や小矢部川においてもアユの死亡や病魚が見られ、検査の結果、エドワジェラ・イクタルリ感染症が主な原因であると推測された。本事例は、富山県においてエドワジェラ・イクタルリ感染症の発生を初めて確認したものである。

(2) 神通川における保菌調査の結果

エドワジェラ・イクタルリ感染症の発生が確認された後、9 月から 11 月にかけて神通川においてアユを採捕し、エドワジェラ・イクタルリ感染症の保菌検査を実施した。その結果、30.0～55.2%の割合でエドワジェラ・イクタルリ菌を保菌しているアユが確認された。10 月および 11 月の河川水温はそれぞれ 19℃および 12℃であった。河川で死亡魚が見られなくなり水温が低下した後も、保菌魚が多数存在することが明らかとなった。

3 成果の活用面・留意点

富山県で初めてエドワジェラ・イクタルリ感染症の発生が確認され、調査の結果、神通川以外の河川においても同感染症がまん延している可能性が考えられた。また、河川で死亡が見られなくなった後でも保菌している個体が多数存在していることが明らかとなった。これらの結果から、今後は冷水病のみでなく、本疾病にも十分な注意を払う必要がある。

さらに、次年度以降、エドワジェラ・イクタルリ感染症について、河川における保菌状況や感染経路の把握、増殖場等における影響を調べる必要がある。

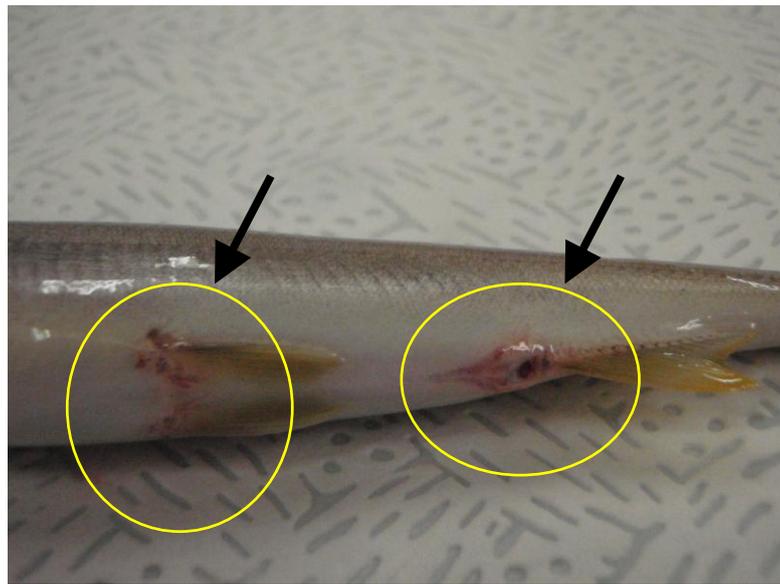
4 問い合わせ先

富山県農林水産総合技術センター水産研究所 内水面課 TEL : 076-475-0036
担当 : 主任研究員 村木 誠一

(参考) 具体的データ

(1) *E.ictaluri* 感染症病魚に見られた主な症状

病魚や死亡魚には、鰭基部の発赤(矢印)、肛門の発赤(矢印)、腹部膨満、出血性腹水等の症状が見られた。



(2) *E.ictaluri* 感染症の保菌調査結果

神通川において、平成22年9月から11月に *E.ictaluri* 感染症の保菌調査を実施した。10月以降は死亡魚が見られなくなり、水温が低下していたが、調査の結果、30.0～55.2%の割合で保菌魚の存在が確認された。

採集月	検査尾数	陽性尾数	保菌率 (%)	水温 (°C)
H22.9月	29	16	55.2	23
H22.10月	11	6	54.5	19
H22.11月	30	9	30.0	12

